

## 「コロナだけじゃない、子どもの感染症が流行 抵抗力低下か、夏風邪「ヘルパンギーナ」は警報レベル

7/22 神戸新聞

子どもの感染症が増えている。兵庫県が今週発表した定点観測結果によると、19歳以下の新型コロナウイルス感染者が急増。子どもがかかりやすい夏風邪「ヘルパンギーナ」やRSウイルスも流行しており、予約を取りづらい小児科も出ている。夏休みに入り、県は帰省やレジャーの際の手洗いや換気、マスク着用など感染対策の徹底を呼びかける。

受診の目安となる症状	■ 38度以上の発熱
	■ 嘔吐（おうと）を繰り返す
	■ おしっこの回数が極端に少ない
	■ 頻回に下痢がある
	■ 物が飲み込めないほどののどの痛み
	■ 呼びかけへの反応が鈍い

(兵庫県感染症対策課への取材による)

【表】受診の目安となる症状

県がまとめた10～16日の定点観測結果によると、新型コロナ感染者は10代が25%と最多で、5～9歳は13%、1～4歳が7%。19歳以下が計47%に上り、30%台だった5月から夏場に入って大きく増えている。

ヘルパンギーナは1医療機関当たり4・43人（前週は同5・38人で今年最多）で尼崎、姫路、明石市のほか伊丹、宝塚、加古川、加東、福崎、豊岡、洲本の各保健所管内で警報レベルに。RSウイルスも同3・56人と高水準が続いている。新型コロナ、ヘルパンギーナに、本来は冬に流行するRSウイルスの感染再拡大が重なった格好だ。

「例年の同時期に比べて明らかに感染症の患者が多く、『予約が取れない』という苦情も来ている」と話すのは、片山キッズクリニック（神戸市灘区）の片山啓院長（70）。通常の診察枠で追い付かず、診察時間を1時間以上オーバーする日もあるという。

片山院長は「コロナの感染対策を徹底したことで昨年と一昨年、他の感染症がほぼ流行せず、多くの感染症にかかる機会がなく抵抗力を失ったのでは。防ぐには手洗いや食べ物の加熱などの対策が大事」と話す。



「手洗いなど基本的な感染対策を」  
と話す片山キッズクリニックの片山  
啓院長 = 神戸市灘区岩屋中町 4

ヘルパンギーナは飛沫や接触によって感染し、高熱が出たり、喉に水疱ができたりするのが特徴。呼吸器感染症のRSウイルスは乳児が感染すると症状が重くなるケースがあるという。

県感染症対策課は子どもを受診させる目安として、38度以上の発熱▽嘔吐を繰り返す▽おしっこの回数が極端に少ないーなどの症状を挙げる。担当者は「親戚などで集まる機会もあると思うが、体調が優れない場合は控えてほしい」と呼びかけている。(竜門和諒)